

〔論 文〕

日本とシンガポールにおける名門高校の現状と課題

—社会に貢献する人材育成の視点から—

シム チュン・キヤット

The Current State of Top High Schools in Japan and Singapore and Issues They Face
—Talent development and social contributions

SIM Choon Kiat

This paper examines and compares the current state of, and issues concerning, top high schools in Japan and Singapore, based on interviews with managerial staff and questionnaire survey data gathered from students. The main findings of the study are summarized below.

First, it is shown that a majority of students from top high schools in both Japan and Singapore come from well-to-do families with parents holding high educational qualifications, and that top Japanese high schools raise their students' awareness of, and encourage them to contribute to the betterment of, society implicitly, while in Singapore such encouragement is very much explicit.

Nevertheless, it was found that the percentage of Singaporean students who responded that they want to become leaders of their country or of society in the future lies within a range not significantly higher than their Japanese counterparts, who fared lower, revealing that both Japanese and Singaporean institutions are not entirely effective in this regard. In addition, it is pointed out in this paper that students who wish to become future leaders of their countries or societies may not coincide with those who consider themselves "elites."

Key words: comparative study (比較研究), top high schools (名門高校), talent development (人材育成), social contribution (社会貢献), elite education (エリート教育)

1. 問題関心の所在

本論文は、日本とシンガポールの教育制度における選抜度の高いトップクラスの高校に焦点を当て、学校の管理職を対象とした聞き取り調査および生徒を対象とした質問紙調査の結果に基づいて、社会に貢献する人材育成の視点から両国における名門高校の現状と課題を比較分析したうえで、「エリート」教育のあり方について検討することを目的とする。

グローバル化の進展と知の世界競争が激しくなる中で、自国の資源とニーズを把握しつつ社会にも貢献できる次世代の人材を育むべく、ほとんどの国では「エリート」教育の推進が重要な政策課題となっ

ている。とりわけ日本やシンガポールのような天然資源の乏しい高度産業国家では経済競争力を維持していくためにも、未来への投資として国の将来を担える「エリート」的人材の育成が国策の一つにさえなりつつある。

そのような動きの一環として、日本では公立中高一貫校の開設が相次ぎ、また理数教育を重点的に行うスーパーサイエンスハイスクールや、学習意欲と学力を高めることを目的とする学力向上フロンティアハイスクールなどが近年急増していることは周知の通りである。だが、「エリート」教育の観点から見れば、これらの取り組みがその一部をなしているとはいえ、「エリート」教育そのものであるとは言

い難い。なぜなら、「エリート」教育は学力の向上と才能の伸長を図るだけにとどまらず、それ以上のものが求められるはずであるからだ。

麻生（2009）によれば、「エリート」を「エリート」たらしめている一般的条件には、

- 1) 時代と社会が要求する卓越した能力を体現すること、
- 2) 社会に対する奉仕の精神をもつこと、および
- 3) 社会の指導者としての自覚をもつこと（ノブレス・オブリージュ）の三つがある。

麻生が示した以上の条件に従えば、秀才やそれに準ずる能力をもつ者は「エリート」になれる条件の一つを備えているだけであって、必ずしも「エリート」になれるとは限らず、同様に才能教育や英才教育も「エリート」教育における重要な形態の一部ではあるものの、「エリート」教育そのものではないということになる。換言すれば、秀才や才能者たちに社会貢献の精神を培わせ、ノブレス・オブリージュを自覚させるような「プラス・アルファ」の教育をも施してこそ初めて「エリート」教育になるといえる。

一方、山内（2002）も主張しているように、日本では「エリート」教育の重要性が認識されながらも、大衆教育における平等性を重視するあまり、それについての議論がはばかられるきらいがある。こうした背景の下で、日本の「エリート」教育はある意味においてレッセ・フェール（自由放任）状態になっており、山内の言葉を借りれば「放っておいても十分な質、十分な数のエリートが自然と育ってくる」だろうという考え方が根強いようである。

しかるに、たとえレッセ・フェールに任せて十分な数の「エリート」が自然発生的に現れてくるとしても、荻谷（2001）が指摘しているように、日本では大学教育の大衆化によってそのような「エリート」たちは受験競争を勝ち抜いてきた「受験エリート」であり、頭の良さが認められつつも、受験勉強を要領よくこなした程度の能力しか有さない者として見られる傾向にあるという。

さらに、荻谷は「受験エリート」の多くが恵まれた階層の出身者であることを示したうえで『東京大

学新聞』が1999年に同大学の新生を対象に行った調査を取り上げ、「自分をエリートだと思うか」という質問に対して「そう思う」と「すこしはそう思う」と答えた学生が3割弱しかなく、日本の最高学府の一つといわれる東京大学の合格者でさえその大多数が自分のことを「エリート」だとは思っていない現実についてその著書の中でふれ、今日の日本において「エリート」意識の欠如について述べている。現代の日本が「エリートの不在」をもって語られるべきなのではないかと橋本（2001）が嘆いたのもそれゆえであろう。このような日本の現状を見かねて、未来のリーダーを養成する「エリート」教育を掲げながらイギリスの名門イトン校をモデルに、日本中部地方の有力企業が中心となって全寮制の中高一貫制男子校を2006年に設立したことは記憶に新しい。

他方、シム（2009）によれば、シンガポールでは「エリート」の選出と育成が教育制度の大前提となっており、独立して以来「エリート」教育に力が注がれてきた歴史がある。そのうえ、近年シンガポールでも日本と同じように中高一貫校が急増し、生徒の人格形成に対して以前にも増して力を入れ、「エリート」やリーダーの養成に一層の努力を傾けている。ただここで、大都会にありがちな個人主義が浸透した高度消費社会であるシンガポールにおいて、社会に貢献する「エリート」を制度的に作り上げることに限界はないのか、という疑問が浮かび上がってくる。あるいは、個人主義が発達した現代社会であるからこそ、学校教育を通しての「エリート」教育の重要性が増している、と見ることもできる。

同じことは、日本にも当てはまる。個性重視や自己実現などの言葉が溢れる今日の日本において、「エリート」の育成をこれまで通りレッセ・フェールに基づいたままを進めても山内が指摘したように一定数の「エリート」が自然と育ってくるのか、あるいは荻谷の主張通りに今の教育政策のままではノブレス・オブリージュの精神に欠ける「受験エリート」や「学歴エリート」ばかりが生み出されるのか、といった疑問も生じてくる。

以上の諸疑問を解き明かすためにも、日本とシン

ガポールにおける名門高校の教育方針について調査を行い、さらにそこに通う生徒を取りまく生活や学習環境を把握するとともに、彼らがどのような規範意識をもっているのかを明らかにしたうえで、両国の「エリート」教育の現状と課題を比較の視点から分析することが重要である。また、荻谷（1995）が指摘したように、階層文化と学校文化とが重なり合うヨーロッパの学校とは違い、日本の学校で教え込まれる文化は、特定の階層や身分集団が占有する文化とは重ならない、学校という場の独自の「中立的」な文化なのである。そうであれば、日本において「エリート」の「作り方」のカギを握っているのも学校教育なのであるといえる。この点に関して、国家としての歴史が浅いシンガポールはなおさらである。

以上の論点を踏まえて、本研究は調査対象である両国だけでなく、社会に貢献する人材の育成に積極的に取り組んでいるほかの国々の教育政策に対しても示唆を与えることが可能であり、またノブレス・オブリージュをもつことが期待される「エリート」の育成を考える際の新たな視点を提供することもできると考えられる。

2. 調査対象の設定と先行研究の検討

麻生（1999）も強調しているように、大学や大学院の段階で初めて才能教育を開始するのでは遅すぎるのであって、才能教育は原則的には「中等教育段階で行われるべきものである」という。この主張に従えば、才能教育以上に人間形成や社会貢献につながる指導が求められる「エリート」教育も中等教育

段階から始められたほうが効果的であるといえよう。

そこで本研究では、中等教育段階において学校文化による影響を長く受け、しかも大学受験を直前に控えているということで「受験エリート」になる可能性が最も高い高校三年生の生徒を調査対象として選んだ。ただし、6-4-2制⁽¹⁾のシンガポールにおいては高校二年生が対象となる。さらに、都市国家シンガポールとの対比をより鮮明にするために、同じ大都会である東京の高校に調査の焦点を当てることにした。

そして、東京都内屈指の国立・私立名門高校に研究の照準を合わせたところ、それらの高校についての研究の蓄積が僅少であることが判明した。関連書籍（中村 2002, 谷川 2007, 日能研進学情報室 2008 など）は多少あるものの、その多くが学校の歴史や教育方針および教育活動を紹介するもの、もしくは学校の進学実績およびその実績につながる取り組みを説明する情報提供本のようなものであり、学校の現場に入り学校関係者や生徒を対象とした調査はほとんど見られない。また、学校文化や生徒意識についての社会学的研究がそもそも乏しいシンガポールにおいても（Chang 2002）、名門高校に関する研究は皆無といっていいほどである。そのような意味でも、両国有数の名門高校の内部に踏み込んで分析のメスを入れる本研究は貴重なものであるといえる。

3. データと方法

本論文の分析に用いられるデータは、表1に示した調査の結果である。調査にご協力をいただいた東

表1 調査の概要

日本調査（東京）	
聞き取り調査 時期: 2008年7月～11月 学校数: 11校 対象: 各校の管理職（校長, 副校長 もしくは校務主任など）	質問紙調査 時期: 2009年6月～7月 対象: 国立高校3校の三年生487人（女子229人） 私立男子高校2校の三年生239人 方法: 集団自記式調査
シンガポール調査	
聞き取り調査 時期: 2008年10月 学校数: 1校 対象: Dean/Affective Education 情操教育・学部長	質問紙調査（英文） 時期: 2009年8月 対象: 独立学校A校のシンガポール人二年生 302人（女子139人） 方法: 集団自記式調査

京にある対象校については、いずれも偏差値が極めて高く大学進学実績も群を抜いて日本全国トップクラスの国立高校および私立男子高校⁽²⁾である。同様に、シンガポールの調査対象校である独立学校⁽³⁾ A校も常に上位を占める進学高校の一つである。

A校については、シンガポールのほかの高校と同じくひと学年あたりの生徒数が日本のその4~5倍に相当する1000人を超えるマンモス校で、かつ同国における典型的な名門高校でもあるゆえ、日本の調査対象校が複数あるのに対し、シンガポールでの対象校はA校一校に絞られた。

なお、本研究はJSPS特別研究員奨励費(研究課題番号:08F08015)の助成を受けて行われたものである。

4. 日本とシンガポールにおける名門高校の現状と特徴

以下では、学校で行った聞き取り調査および生徒を対象とした質問紙調査の結果を中心に、両国の名門高校を比較しつつ、その相違点と共通点を明らかにしていく。(質問紙は本稿末尾参照。)

4.1 生徒の家庭環境および学校による働きかけの比較

両国の名門高校生徒を取りまく学習と家庭環境および学校による彼らへの働きかけの相違点を探るべく、通塾率や親の学歴と家の豊かさ、または学校の先生について尋ねた項目をそれぞれ比較したのが、表2である。

表2 生徒の生活・学習環境について (「とても・まああてはまる」の%)

	日本			シンガポール	
	国立高校		私立 男子校	独立高校	
	男子	女子		男子	女子
N=	258	229	239	163	139
2-1 通塾率について					
小学校時	78.5	73.7	99.1	47.2	46.0
中学校時	86.2	86.9	35.8	25.2	43.9
高校時(現在)	95.3	90.4	89.9	37.1	45.3
2-2 親学歴と家の豊かさについて					
父学歴: 大学以上	92.5	90.8	93.1	49.4	48.9
父学歴: 大学院以上	16.7	14.0	21.0	22.2	23.0
母学歴: 大学以上	69.8	66.7	72.1	35.5	33.8
母学歴: 大学院以上	3.6	7.0	6.4	6.9	7.9
家は豊かである	84.4	77.7	91.9	66.6	78.0
2-3 学校の先生について					
学問的にとても優れている	88.7	91.7	85.2	93.8	92.8
生徒の意見を大事にしてくれる	70.3	88.7	71.5	89.4	89.9
「勉強や受験が重要だ」と強調している	9.8	13.1	16.5	93.8	95.6
「国や社会のリーダーになりなさい」と言う	32.5	22.1	12.3	81.3	85.6
「将来は社会のために貢献しなさい」と言う	34.4	28.8	18.7	93.8	90.6

(無回答は除いた)

まず、表2-1からわかることは、日本では名門高校の生徒のほとんどが小学校段階から塾に通ってお

り、小学校から現在に至り通塾率(週1時間1科目も含む)がシンガポールの生徒に比べると非常に高

いことである。例外的なのが、日本の私立男子校の中学校時における通塾率だけである。これは、対象校の私立男子校の二校がともに中高一貫校であり、生徒は試験なしで高等部に進学できるため、インタビュー調査でその二校の管理職から聞いた言葉を借りれば、中学校の時期に勉強の面で「中弛み」が発生しやすいからだそうである。それに対して、日本の国立高校では高等部への進学時に内部選抜が行われるため、中学校時の通塾率が私立男子校のように低下しないと考えられる。

表 2-2 は生徒の親の学歴と家の豊かさを比較したものである。表から、日本の名門高校に通う生徒の場合は大学以上の学歴をもつ父親が 9 割を超えており、同じく大学以上の学歴をもつ母親の割合も 3 分の 2 以上であることが見て取れ、対象校生徒の親の学歴が非常に高いことがわかる。それに対して、シンガポール A 校の生徒の場合は父学歴と母学歴がそれぞれ 5 割弱と 3 割台半ばにとどまっていることも表からわかる。しかしながら、シンガポールにおける大学進学率が現在でも 2 割台であることを考えれば（シム 2009）、大学以上の学歴をもつ A 校生徒の親の割合も全国平均を大きく上回っていることになる。一方、大学院以上の学歴をもつ親の割合では、シンガポール A 校の場合のほうが日本よりも高いことが興味深い。

また表 2-2 から、両国の名門高校に通う生徒の家が総じて経済的に豊かであることも認められる。なかでも、「家は豊かである」と答えた割合が最も高いのが、入学前の学校外教育投資や授業料などの諸費用の負担が大きいと考えられる日本の私立男子校生徒である。それに比べて、家は豊かであると答えたシンガポール A 校の男子生徒が過半数を占めてはいるものの、その割合が 6 割台にとどまっていることが注目されるべきであろう。これについては、A 校のような、普通の高校の約 10 倍もの授業料（月額 S\$300 シンガポールドル {2013 年 11 月現在約 24,000 円}）を課す独立学校の場合では、家族の月収額に応じて授業料が減額されたりもしくは全額免除されたりするといった教育支援策が取られていることが原因の一つとして考えられる。そのうえ、ほとんど

の生徒が小学校のときから塾に通い続けてきた日本の名門高校生徒の場合とは異なり、シンガポールの A 校では塾や家庭教師などを利用する生徒の割合が小中高校を通じて 5 割を超えることなく、学校外教育に投資せずとも半分以上の生徒が入学できたことも大きな原因となっているであろう。

次に、表 2-3 に示した学校の先生について尋ねた質問項目への回答については、「学問的にとても優れている」「生徒の意見を大事にしてくれる」の両項目について、両国の生徒とも先生のことを高く評価していることが表から看取される。それに対して、先生は「『勉強や受験が重要だ』と強調している」「『国や社会のリーダーになりなさい』と言う」「『将来は社会のために貢献しなさい』と言う」の三項目については、両国の生徒の間に大きな差が見られる。シンガポール A 校の先生が勉強や受験が重要だと強調しているばかりでなく、生徒たちに国や社会のリーダーになって社会貢献するようにも常に説いているのに対して、日本の対象校の先生はそれらのことを特に強く主張したりはしないことが表から明らかである。

実際に、以下に記すように、両国の対象校で行った聞き取り調査でも、上記のことを裏付けるような発言が多く得られている。例えば、生徒の社会貢献意識について、ある日本の国立高校の副校長は学校の教育方針を次のように説明する。

「その生徒がその生徒なりに自分がどういうふうに関わりと関わるかということを考えて、それを実現してくれればいい。」

また、同じ質問に対してある私立男子校の校務主任は以下のように述べる。

「様々な分野で自分の力を出してもらえれば、それはそれで最高なので、特にリーダーを育てるというようなことはしていない。」

さらに、生徒の社会貢献意識よりも生徒の自主と自由を重んじると別の国立高校の副校長は以下のように強調する。

「挑戦し、創造し、貢献する生き方を目指す人間を育てたいという目標はありますが、ただ伝統的にこの学校が一番重視するのはやはり自由。」

以上から、日本の「エリート」教育が自由放任状態になっていることについて、生徒を対象とした質問紙調査からだけでなく、各対象校で行った聞き取り調査からも確認できた。

一方で、シンガポールの A 校で同じ質問をしたところ、同校の情操教育・学部長は以下のように語る。

‘We are focusing a lot on character education, as we want them to be stronger, to be resilient, to be leaders and to contribute to society.’

(われわれは人格教育に非常に重点を置いており、生徒たちにより遅しく、より打たれ強く、そしてリーダーになって社会に貢献してほしいと思う。)

上述の発言内容と表 2-3 に示した A 校生徒の質問紙調査の結果は共にシンガポールにおける人材育成型の「エリート」教育を示したことにほかならない。そもそも情操教育・学部長という役職が設置されていること自体が、「プラス・アルファ」の教育を積極的に推し進めようとする同校の教育理念を表す最たる証拠といえよう。

4.2 学業・進路・将来・社会などに対する生徒の意識の比較

表 3 は授業・成績、進学希望、「エリート」意識や将来観および社会的弱者や社会との関わりについて

表 3 学業・社会・将来に対する生徒の意識

(「とても・まああてはまる」の%)

	日本			シンガポール	
	国立高校		私立	独立高校	
	男子	女子	男子校	男子	女子
N =	258	229	239	163	139
3-1 授業と成績について					
学校の授業は簡単だ	25.6	20.1	27.5	45.4	31.2
良い成績をとると友達に優越感を感じる	52.3	53.1	56.9	32.5	27.3
3-2 進学希望について					
東大を目指す (シンガポール: Harvard, Stanford, MIT, Cambridge, Oxford を目指す)	64.4	29.3	41.2	21.9	12.4
日本国内のほかの難関大学を目指す (シンガポール: ほかの海外難関大学を目指す)	31.2	62.0	47.9	35.1	42.1
3-3 「エリート」意識について					
自分はエリートだ	33.2	25.3	36.5	37.5	43.2
国や社会のリーダーになりたい	34.9	25.7	32.0	55.2	50.0
どんな分野でもいいから、一番になりたい	53.3	44.2	58.9	47.9	37.8
3-4 将来について					
将来は、ハッピーになれる自信がある	59.3	76.8	63.6	76.3	79.1
将来、自分は社会の役に立つと思う	47.0	53.1	50.2	90.0	94.2
3-5 社会的弱者や社会との関わりについて					
成績の悪い者、もしくは学歴の低い者が、将来損をするのはその人の責任である	56.9	48.9	61.8	58.7	40.9
社会的弱者を助けたい	55.7	68.1	43.7	90.8	94.9
国の繁栄より自分の幸せのほうが重要だ	71.3	62.1	71.4	62.6	57.7

(無回答は除いた)

て両国の生徒の考え方の違いを比較したものである。

まず、表3-1からは「学校の授業は簡単だ」という質問項目についてより多くのシンガポールの生徒が肯定的に答えているのに対して、「良い成績をとると友達に優越感を感じる」の項目については日本対象校の生徒の肯定率のほうがシンガポールの生徒よりも高く、国立・私立を問わずいずれも5割を超えているという興味深い結果が読み取れる。

次に、表3-2が示すように質問紙調査時点における両国の生徒の進学希望について尋ねたところ、日本の場合には進学先として東京大学を目指す生徒が多く、なかでも男子生徒のその割合が高く、とりわけ国立高校の男子生徒の6割以上もが同大学への進学を希望することが注目される。さらに、東京大学以外の日本国内難関大学を目指す生徒の割合も加えれば、日本の調査対象校のいずれにおいても9割前後の生徒が国内難関大学に入学することを目指していることになる。それに対して、シンガポールA校の場合には、日本人生徒の強い国内志向とは異なり、性別を問わず半分以上の生徒が同国ではいわゆるビッグ5（ハーバード大学、スタンフォード大学、マサチューセッツ工科大学、ケンブリッジ大学とオックスフォード大学を指す）を含む海外の難関大学への進学を目指していることが同表からわかる。

一方、「自分はエリートだ」の質問項目に対して「あてはまる」と答えた対象校の男子生徒の比率が両国とも3割強程度であることが表3-3に示されている。女子生徒についていえば、日本の場合には「自分はエリートだ」と答えた女子生徒の比率が男子生徒より低いとは逆に、シンガポールでは同じ質問に対する女子生徒の肯定率が男子生徒よりも高いことが表からも見て取れる⁽⁴⁾。第一節では、自分のことを「エリート」だと思ふ東京大学の新入生が3割弱しかないとする『東京大学新聞』の調査結果にふれたが、本調査の結果もその割合に近い数字を示したことに注目すべきであろう。つまるところ、自由放任型の日本でも人材育成型のシンガポールでも、名門高校の生徒といえども自分のことを「エリート」だと思ふ生徒の割合は3~4割程度であるということになる。しかしながら、同表が示すように

「国や社会のリーダーになりたい」と答えたシンガポールの生徒の割合が5割を超えており、総じて日本の生徒より高いのに対して、「どんな分野でもいいから、一番になりたい」と思ふ生徒の比率は日本の対象校のほうが逆に高い傾向も見られる。

さらに、表3-4から「将来は、ハッピーになれる自信がある」の質問項目については、「あてはまる」と答えた日本対象校の男子生徒の割合が比較的やや低いとはいえ、全体として両国の名門高校に通う生徒の多くが将来に対して楽観的な見通しをもっていることがわかる。ところが「将来、自分は社会の役に立つと思う」の質問項目に関しては、シンガポール人生徒の肯定率が9割を超えているのに、日本人生徒の同比率は男女を問わず約5割程度にとどまり、両国の間に大きな差が見られる。

最後に、表3-5が示すように「成績の悪い者、もしくは学歴の低い者が、将来損をするのはその人の責任である」の質問項目に対して「あてはまる」と回答した生徒の比率が両国の間に大きな差は認められないものの、「社会的弱者を助けたい」の質問項目については「あてはまる」と答えたシンガポール人生徒の比率が日本人生徒よりはるかに高いことは明らかである。反対に「国の繁栄より自分の幸せのほうが重要だ」の項目に関しては、男女ともに日本人生徒の肯定率がシンガポール人生徒より上回り、日本人男子生徒についてはその比率が国立・私立を問わず7割を超えていることが注目に値する。

4.3 職業に対する生徒の意識の比較

質問紙の中に12種類の職業の選択肢を設け⁽⁵⁾、その中から「できることなら、つきたい職業」と「あまりつきたくない職業」について一つずつを調査対象の生徒に選んでもらったところ、表4に示した結果が得られた。

職業意識に関する調査結果からまずわかることは、「つきたい職業」について日本人生徒の場合には教授・研究者、医師、エンジニアなど専門性を活かせる職業が最も人気があるのに対し、シンガポールA校の生徒ではトップ3に選ばれたのが起業家、大企業管理職、上級国家公務員などリーダーシップが発揮しやすいような職業が目立つことである。

表4 できることなら、つきたい職業とあまりつきたくない職業

ト ッ プ	日本			シンガポール	
	国立高校		私立 男子校	独立高校	
	男子	女子		男子	女子
できることなら、つきたい職業ベスト3					
1位	教授・研究者 (19.9%)	医師 (21.6%)	教授・研究者 (22.8%)	大企業管理職 (14.3%)	医師 (19.9%)
2位	医師 (15.1%)	教授・研究者 (15.1%)	医師 (17.1%)	起業家 (13.0%)	上級国家公務員 (16.9%)
3位	エンジニア (13.9%)	弁護士・法律家 (12.4%)	エンジニア (15.8%)	医師 (12.4%)	起業家／芸術家 (同 12.5%)
できることなら、あまりつきたくない職業ワースト3					
1位	政治家 (21.7%)	政治家 (21.6%)	政治家 (29.3%)	政治家 (22.8%)	政治家 (27.5%)
2位	芸能人 (13.8%)	教員 (18.1%)	芸能人 (18.3%)	スポーツ選手 (19.8%)	スポーツ選手 (18.8%)
3位	教員 (13.0%)	芸能人／選手 (同 11.5%)	医師 (12.7%)	芸能人 (11.7%)	教員／エンジニア (同 10.9%)

一方、「あまりつきたくない職業」に関しては、国籍・性別を問わず政治家がトップを独占しており、日本だけでなくシンガポールでも「政治家」は決して人気職業ではないことが浮き彫りになった。また「あまりつきたくない職業」として、芸能人やスポーツ選手など高学歴を有することが前提条件でない職業が選択されたのは理解できるにしても、「教員」も選ばれたことが興味深いところである。

4.4 「自分はエリートだ」と答えた生徒の特徴

「エリート」意識をもつ生徒の特徴を明らかにするため、「自分はエリートだ」と思うかどうかを従属変数とし、生徒の性別、親学歴と経済的豊かさに加え、これまで見てきた諸々の意識などを独立変数として投入したロジスティック回帰分析を行った。その結果が示された表5からは、「自分はエリートだ」と思う日本とシンガポールの名門高校生徒について次のことを指摘することができる。

第一に、属性に関していえば、シンガポールでは「自分はエリートだ」と思うかどうかについて有意な影響をもつ変数は性別だけであるのに対し、日本では家の豊かさが有意な効果をもつことが表からわ

かる。一方、両国とも親の学歴による影響は見られない。

第二に、授業や成績に関しては、両国のいずれにおいても「学校の授業は簡単だ」と思う生徒ほど「自分はエリートだ」と思う確率が高くなるのに対して、「よい成績をとると友達に優越感を感じる」という変数についてはシンガポールの場合に限って有意な効果が見られ、優越感を感じる生徒ほど「自分はエリートだ」と思う確率が3倍以上も高くなることが表から読み取れる。

第三に、進学については、ほかの要因を統制した後でも、日本の名門高校の場合なら東京大学、シンガポールのA校ならビッグ5もしくはそのほかの海外難関大学を目指す生徒ほど「エリート」意識が高くなる傾向が認められる。

第四に、日本の名門高校では「国や社会のリーダーになりたい」「どんな分野でもいいから、一番になりたい」と思う生徒ほど、そして「将来は、ハッピーになれる自信がある」と思う生徒ほど、または「将来、自分は社会の役に立つと思う」と答えた生徒ほど「自分はエリートだ」と思う確率が高くなる

表5 「自分はエリートだ」の規定要因 (ロジスティック回帰分析)

	日本		シンガポール	
	B	Exp (B)	B	Exp (B)
男子ダミー	.193	1.213	-.803*	.448
父大学院以上ダミー	.028	1.029	.098	1.103
母大学以上ダミー	.324	1.383	-.126	.881
家は豊かである	.804*	2.234	-.176	.839
学校の授業は簡単	.482*	1.620	.767*	2.153
良い成績をとると優越感	.256	1.292	1.298***	3.660
東大 (Big 5 か海外難関) を目指す	.453*	1.573	.713*	2.039
国や社会のリーダーになりたい	.829***	2.290	.515	1.673
一番になりたい	.512*	1.669	.115	1.122
将来ハッピーになる自信あり	.836***	2.308	1.752***	5.764
将来社会の役に立つと思う	.442*	1.556	.817	2.264
将来損をするのはその人の責任	.353	1.424	.230	1.259
社会的弱者を助けたい	.111	1.118	.079	1.082
国の繁栄より自分の幸せ	.374	1.454	1.058**	2.879
政治家になりたくないダミー	-.200	.819	-.476	.621
国立高校ダミー	-.109	.896	—	—
定数	-4.161***	.016	-4.175***	.015
N (欠損値除外)	676		260	
Model Chi-Square	148.244		87.692	
R ²	.197		.286	
Cox & Snell	.276		.386	
Nagelkerke	.000		.000	
Sig.				

*: 5% 水準で有意, **: 1% 水準で有意, ***: 0.1% 水準で有意

のに対し、シンガポールの場合では「エリート」意識に有意な影響を及ぼしているのは「将来は、ハッピーになれる自信がある」および「国の繁栄より自分の幸せのほうが重要だ」という変数だけである。このことは、「自分はエリートだ」と思う日本の生徒ほど社会貢献意識が高いのに対して、同じように思うシンガポールの生徒ほど自己中心的な者が多い可能性が高いことを示唆している。

そして最後に、「政治家になりたくないダミー」と日本の分析だけに加えた「国立高校ダミー」という変数による有意な影響は見られないことも確認されている。

4.5 「国や社会のリーダーになりたい」と答えた生徒の特徴

ところで、今回の調査で明らかになったことの一つに、日本とシンガポールとでは「エリート」という言葉への解釈が異なることは言うまでもなく、それ以上に両国とも同語に対するイメージが必ずしも

良いとは限らないということがある。例えば、ある日本の国立高校の副校長は次のように述べる。

「日本はちょっとそのへん、エリートという言葉がもつイメージが二つありますよね。あまり良いイメージじゃないほうのイメージがちょっとありますけどね。」

また、「エリート」の意味についてある私立男子校の校長は以下のように答える。

「見せかけのエリートといますかね、自称エリートと真のエリートとは異なるんですよ。」

上述したように、日本では「エリート」という言葉に負のニュアンスがあることがわかる。同様に、シンガポールにおいても A 校の情操教育・学部長が以下に説明する通り、「エリート」という言葉にまつわるイメージが良くないようである。

‘We hardly use the word “elite,” because there is a negative connotation to it. It leads to elitism. I don’t think you will see a lot of schools using the word “elite.” We don’t say elite schools, but top schools.’

(「エリート」という言葉をわれわれはほとんど使わない。ネガティブな含意があるから。エリート主義を連想させる。「エリート」という言葉を使っている学校はそんなになくと思う。トップ校だとわれわれはいうけど、エリート校だとはいわない。)

以上の背景から、本調査の対象校には「自分はエリートだ」という意識をもたずとも「国や社会のリーダーになりたい」と思う生徒もいるはずだと考えられ、自分のことを「エリート」だと思わないからといって社会貢献意識が低いと結論づけることは早急であろう。そこで「国や社会のリーダーになりたい」と思う生徒の特徴を明らかにすべく、「自分は

エリートだ」という従属変数と「国や社会のリーダーになりたい」という独立変数だけを入れ替え、「国や社会のリーダーになりたい」と思うかどうかを従属変数としたロジスティック回帰分析も行った。そして、その分析の結果を示した表6と先の表5を比較すると、以下のことを指摘することができる。

第一に、属性に関してはシンガポールでは有意な影響を与えている要因が皆無であるのに対し、今度は日本の名門高校で「男子ダミー」変数が有意な効果をもつことが表からわかる。言い換えれば、「国や社会のリーダーになりたい」と思うかどうかについて、シンガポールの場合では性別が有意な影響を及ぼさないのに対して日本の対象校では男子のほうが確率が高いということになる。

第二に、表5とは違って、授業や成績に関して今度はなんら影響ももたないことが表6から読み取れる。

第三に、進学希望については、シンガポールでは

表6 「国や社会のリーダーになりたい」の規定要因（ロジスティック回帰分析）

	日本		シンガポール	
	B	Exp (B)	B	Exp (B)
男子ダミー	.658*	1.931	.474	1.606
父大学院以上ダミー	.129	1.138	.025	1.025
母大学以上ダミー	-.093	.911	-.022	.978
家は豊かである	-.074	.929	-.170	.843
学校の授業は簡単	.307	1.359	-.187	.829
良い成績をとると優越感	.046	1.047	.071	1.074
東大（Big 5 か海外難関）を目指す	.071	1.074	.686*	1.987
自分はエリートだ	.856***	2.354	.475	1.608
一番になりたい	1.539***	4.662	.787*	2.197
将来ハッピーになる自信あり	.055	1.056	-.275	.759
将来社会の役に立つと思う	1.394***	4.033	1.632*	5.115
将来損をするのはその人の責任	.152	1.164	-.081	.922
社会的弱者を助けたい	.698**	2.010	1.628*	5.095
国の繁栄より自分の幸せ	-.812***	.444	-.508	.602
政治家になりたくないダミー	-.851**	.427	-1.041**	.353
国立高校ダミー	.206	1.229	—	—
定数	-3.324***	.036	-3.061**	.047
N (欠損値除外)	676		260	
Model Chi-Square	232.563		58.771	
R ²	Cox & Snell		.291	
	Nagelkerke		.410	
	Sig.		.000	

*: 5% 水準で有意, **: 1% 水準で有意, ***: 0.1% 水準で有意

「国や社会のリーダーになりたい」と思う生徒が「自分はエリートだ」と思う生徒と同様に海外の難関大学を目指す傾向があるのに対して、日本の対象校では「国や社会のリーダーになりたい」と思う生徒が、「自分はエリートだ」という意識をもつ生徒とは異なって、東京大学を目指さなくなるということが特に興味深い。

第四に、日本の場合では「自分はエリートだ」と思う生徒ほど「国や社会のリーダーになりたい」確率が高くなるのに対して、シンガポールの場合は「エリート」意識が有意な効果をもたないことが表から看取できる。また、両国のいずれにおいても「どんな分野でもいいから、一番になりたい」と思う生徒ほど「国や社会のリーダーになりたい」と思う確率が高くなるものの、その確率が日本の対象校では4.6倍以上であるのに対して、シンガポールのほうはその半分の2.2倍程度にとどまっていることが注目されるべきである。さらに、両国とも「将来、自分は社会の役に立つと思う」生徒ほど、そして「社会的弱者を助けたい」と答えた生徒ほど「国や社会のリーダーになりたい」と思う確率も高くなるのだが、その確率が日本の場合でそれぞれ4倍と2倍であるのに対し、シンガポールのA校ではいずれも5倍を超えていることも注目に値する。

第五に、表5と表6を比較すると「国の繁栄より自分の幸せのほうが重要だ」という独立変数について、両国ともその回帰係数が表5の正から表6の負に変化しただけでなく、表6ではシンガポールの場合表5にあった有意な効果がなくなり、反対に日本の対象校についてはその効果が有意にあらわれることがわかる。言い換えれば、日本の場合は「国の繁栄より自分の幸せのほうが重要だ」と思わない生徒ほど「国や社会のリーダーになりたい」と思う確率が高くなる。さらに、表5では両国とも有意な効果をもたなかった「政治家になりたくないダミー」変数が表6で有意な効果が見られ、またその係数も負であることから「できることならあまりつきたくない職業として「政治家」を選ばない生徒ほど「国や社会のリーダーになりたい」と思う確率が高くなるということが認められる。

そして第六に、表5と同様に日本の分析に国立高校ダミーという変数を加えたところ、学校区分による影響はここでも見られないことが確認される。

最後に、表5と表6の分析結果を比べると、「自分はエリートだ」と思う生徒グループの特徴と「国や社会のリーダーになりたい」と思う生徒グループの特徴とでは、日本の場合よりもシンガポールのほうがそれぞれの生徒グループの間に大きな違いがあることがわかる。

5. 結 語

本論文の分析から得られた主な知見は、以下のようによまとめられる。

まず、日本でもシンガポールでも、名門高校に通う生徒の親学歴が平均以上に高く、また家も経済的に豊かである場合が多い。ただし、小学校の段階から通塾しなくても名門高校に進学できることや教育支援策などが積極的に実施されているシンガポールのほうが、家が豊かであるという生徒の割合が日本の場合と比べてやや低い傾向にあることも本研究でわかった。

次に、これまでの研究が指摘してきたように、生徒の社会貢献意識を喚起するにあたり、自由放任型のレッセ・フェールに任せる日本の名門高校が暗黙的 (Implicit) であるのに対して、人材育成型に基づくシンガポールの名門高校は明示的 (Explicit) であることが本研究によって確認された。しかし、それにもかかわらず、自分のことを「エリート」だと思ふ両国の名門高校生の割合がともに3~4割程度にとどまり、さほど大きな差が見られないことも明らかになった。とはいえ、「自分はエリートだ」と思うかどうかについて、家の豊かさがシンガポールでは有意な影響を与えないのに対し、日本の場合は有意な効果をもつことが注目すべき点である。

さらに、日本の名門高校では「自分はエリートだ」という意識をもつ生徒ほど「国や社会のリーダーになりたい」と思う確率が高く、またその逆の場合もそうであるのに対し、シンガポールの場合では「エリート」という言葉に対するイメージが日本以上にネガティブのためか、同じような相関関係は見られ

ない。また、両国の名門高校とも「将来、自分は社会の役に立つと思う」生徒ほど、または「社会的弱者を助けたい」と思う生徒ほど「国や社会のリーダーになりたい」傾向が強く、人材育成型のシンガポールでは言わずもがなでも、レッセ・フェールに任せる日本の学校教育も、山内（2002）が指摘したように、「放っておいても」それなりに機能はしているともいえるかもしれない。

しかし忘れてはならないのは、日本の名門高校において「国や社会のリーダーになりたい」と思う生徒の割合が2~3割台と低いという現状があるうえに、「将来、自分は社会の役に立つと思う」または「社会的弱者を助けたい」と思う生徒の割合が、シンガポールの場合と比べると決して高いとはいえないという課題も見られる。それだけではない。日本の場合は私立高校と主に国民の税金で賄われる国立高校との間に、リーダー的人材の育成および社会奉仕に関する教育方針について、またそれに対する生徒の意識についてさほど大きな開きがないという点も課題の一つとなろう。

一方、シンガポールの名門高校でも「国や社会のリーダーになりたい」と思う生徒の割合が5割程度にとどまり、制度的にリーダーを育て上げることの限界が垣間見えた結果となった。だが、ひと学年あたりの生徒数が1000人以上の同校で「将来、自分は社会の役に立つと思う」「社会的弱者を助けたい」と思う生徒の割合がともに9割を超え、日本人生徒の割合よりはるかに高いことは人材育成型教育の推進による成果といえよう。そのようなシンガポールから見れば、同じく秀才たちが集結する日本の名門高校において、リーダーの育成や生徒の社会との関わり方などが従来のようなレッセ・フェールのままでは人的資源を十分に活かすきれないことになる。

特定の階層文化と学校文化とが重なり合わない日本とシンガポールにおいて、国の将来を担う「エリート」的人材やリーダーの「作り方」のカギを握っているのが「中立的」な学校で教え込まれる文化である以上、学校教育を通して伝わるその文化についての研究が重要でないはずがない。そのような意味で、本研究で浮き彫りになった課題を踏まえ、教師

と生徒を対象とした聞き取り調査、および生徒の学校生活と学校の取り組みやその評価制度についての考察を中心としたフィールドワークを行い、両国の名門高校にさらに踏み込んで分析のメスを加えることが不可欠である。そのことを今後の課題としつつ、本研究で得られた知見が人材育成および「エリート」教育をめぐる議論に、あるいは日本の場合ではそのような議論すら欠けている状態に、新たな視点を提供できることを願う。

注

- (1) シンガポールの教育制度は基本的に「6-4-x」制の分岐型であり、最初の10年間の小・中学校段階を終えた後の進路によって最後の未知年数「x」が決まる。名門高校の生徒の場合では $x=2$ である。
- (2) 偏差値の高い東京都内の私立女子高校にも本研究へのご協力をいただけることを今後の課題としたい。
- (3) 私立高校が基本的に存在しないシンガポールにおいて、8校しかない（2013年現在）独立学校の場合では、学校の運営予算のほとんどが教育省から支給されるものの、普通の学校に比べてより高い裁量権と自主性が与えられている。
- (4) シム（2009）によれば、シンガポールでは25歳以下の人口における女性の数がほとんどのコホートにおいて男性より少ないにもかかわらず、高校や大学への進学率が過去7年間ほとんど男性を上回っている。ただし、その解釈については一定の見解は得られていない。
- (5) 12種類の職業選択肢は①政治家、②医師・歯科医・獣医、③大学教授・研究者、④国家公務員（上級職）、⑤弁護士・法律家、⑥教員、⑦エンジニア・技術者、⑧起業家・会社/店の経営者、⑨大企業の管理職、⑩音楽家・芸術家、⑪俳優・歌手・芸人、⑫スポーツ選手であり、該当する選択肢が見つからない少数の回答者は空欄もしくは「なし」と記載した。

参考文献

- 麻生誠，1999，「才能教育と学校一適能教育を構想する一」
麻生誠・天野郁夫編『現代日本の教育課題—21世紀の教育を求めて—』放送大学教育振興会，pp. 184-203
麻生誠，2009，『日本の学歴エリート』講談社
Chang, J. Han-Yin, 2002, "Education", Tong Chee

Kiong and Lian Kwen Fee eds., *The Making of Singapore Sociology: Society and State*, Times Academic Press, pp. 130-154

橋本伸也, 藤井泰, 渡辺和行, 進藤修一, 安原義仁著, 2001, 『エリート教育 (近代ヨーロッパの探求 4)』 ミネルヴァ書房

荻谷剛彦, 1995, 『大衆教育社会のゆくえ—学歴主義と平等神話の戦後史』中央公論社

荻谷剛彦, 2001, 『階層化日本と教育危機—不平等再生産から意欲格差社会へ』有信堂

中村忠一, 2002, 『エリートへの道は中学・高校選びで決

まる—優秀校の教育システムの秘密—』エール出版社
日能研進学情報室, 2008, 『中高一貫校』筑摩書房

シム・チュン・キャット, 2009, 『シンガポールの教育とメリトクラシーに関する比較社会学的研究—選抜度の低い学校が果たす教育的・社会的機能と役割—』東洋館出版社

谷川彰英編, 2007, 『日本の教育を拓く—筑波大学附属学校の魅力—』晶文社

山内乾史, 2002, 『学力低下論』考—エリート教育・大衆教育との関連から—』『大學教育研究』第10号, 神戸大学・大学教育研究センター, pp. 65-75

附
質問紙 (日本語版)

2009年6月~8月

高校生の生活と意識に関する調査

研究代表者: 荻谷剛彦 教授・本田由紀 教授 (東京大学大学院教育学研究科)
研究実施者: シム チュン キャット (外国人特別研究員)

調査へのご協力をお願い

このアンケートは、日本とシンガポールの両国の高校教育の現状を知るために、高校三年生のみなさんが日頃どのような生活をし、どのようなことを考えているかをおたずねするものです。みなさんに記入していただいたあと、結果はすべて統計的に処理され、また研究目的のみに使われますので、みなさんの回答が誰かに知られるようなことは、決してありません。
答えは、特に指示のない限り番号に ○ をつけるか、[] に記入してください。ただし、答えたくない設問は無回答で良いです。
それでは、ありのまま、思うままにお答えください。

● **まず、あなたご自身のことについておかがいします。**

Q1. 性別 …………… 1. 男 2. 女

Q2. あなたの卒業した小学校・中学校は、それぞれ次のどれにあてはまりますか。
a~eのそれぞれについて、あてはまる番号1つに ○ をつけてください。

a. 小学校 ……	1. 公立	2. 国立	3. 私立	4. 海外・その他 ^[具体的に]
b. 中学校 ……	1. 公立	2. 国立	3. 私立	4. 海外・その他 ^[具体的に]
c. 中学校は、現在の高校と同じ系列の学校ですか ……………	1. はい	2. いいえ		

Q3. いまの学校に、3年前もしくは6年前に、入学した理由についてうかがいます。
a~eのそれぞれについて、あてはまる番号1つに ○ をつけてください。

	とてもあてはまる	まああてはまる	まああてはまらない	まったくあてはまらない
a. 自分が入りたかったから ……………	1	2	3	4
b. 親が入ってほしかったから ……………	1	2	3	4
c. この学校が有名だから ……………	1	2	3	4
d. この学校の教育方針・校風に惹かれたから ……………	1	2	3	4
e. この学校の行事・部活に惹かれたから ……………	1	2	3	4

Q4. いま住んでいる家から学校までの通学時間はどのぐらいかかりますか。

1. 30分以下 ; 2. 30分~1時間 ; 3. 1時間~1時間半 ; 4. 1時間半~2時間 ; 5. 2時間以上

Q5. あなたの家は、以下のどれにあてはまりますか。

1. 持ち家 (一戸建て)	2. 持ち家 (分譲マンションなど)
3. 借家・賃貸マンションなど	4. その他 ^[具体的に]

Q6. あなたが得意とすることを、すべて選んで番号に ○ をつけてください。

1. 勉強	2. 英語・外国語	3. 理数学
4. プレゼンテーション	5. 作文・論文の作成	6. 弁論・ディベート
7. 歌・合唱	8. 楽器 (ピアノ、バイオリンなど)	9. バレエ・ダンス
10. 球技	11. 格技 (柔道、剣道など)	12. 水泳・陸上
13. その他 ^[具体的に]		

● **あなたの学校生活や学習と勉強についておかがいします。**

Q7. あなたの現在の高校生活はどうか。
a~nのそれぞれについて、あてはまる番号1つに ○ をつけてください。

	とてもあてはまる	まああてはまる	まああてはまらない	まったくあてはまらない
a. 学校は楽しい ……………	1	2	3	4
b. 学校の部活は楽しい ……………	1	2	3	4
c. 学校の行事は楽しい ……………	1	2	3	4
d. 学校の部活には積極的に参加しているほうだ ……………	1	2	3	4
e. 学校の行事には積極的に参加しているほうだ ……………	1	2	3	4
f. 卒業生が学校の活動に協力してくれる ……………	1	2	3	4
g. 他の学校に比べて、この学校にはかなりお金がかかっていると思う ……………	1	2	3	4
h. この学校の生徒として誇りを感じる ……………	1	2	3	4
i. 学校には「すごいヤツ」がいっぱいいる ……………	1	2	3	4
j. この学校は学業成績の良い生徒を表彰する ……………	1	2	3	4
k. 卒業後、この学校の活動に協力したい ……………	1	2	3	4
l. この学校の生徒としてプレッシャーを感じる ……………	1	2	3	4
m. この学校の校則は厳しい ……………	1	2	3	4
n. 他の学校に移りたいと思ったことがある ……………	1	2	3	4

Q8. 学校の授業の中で、あなたはどのぐらい、次のものを身につけていると思いますか。
a~hのそれぞれについて、あてはまる番号1つに ○ をつけてください。

	身につけている	まあ身につけている	まあ身につけていない	身につけていない
a. 試験で点をとるためのテクニック ……………	1	2	3	4
b. 仕事にいったときに、すぐに役に立つ知識・技術 ……………	1	2	3	4
c. 論理的に考えたり、説明したりする力 ……………	1	2	3	4
d. 経済や政治、社会のしくみに対する理解 ……………	1	2	3	4
e. 社会の一員としての良識・自覚 ……………	1	2	3	4
f. 将来の職業生活についての見通し ……………	1	2	3	4
g. 人とうまくやっていく力 ……………	1	2	3	4
h. 自分らしく生きる力 ……………	1	2	3	4

Q9. いまの学校の授業についてあなたはどのように思いますか。
a~fのそれぞれについて、あてはまる番号1つに○をつけてください。

	とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
a. 学校の授業はおもしろい	1	2	3	4
b. 学校の授業は簡単だ	1	2	3	4
c. 学校の授業は物足りない	1	2	3	4
d. 学校の授業で知的興奮を味わったことがある	1	2	3	4
e. 学校の授業は受験に役に立つと思う	1	2	3	4
f. 学校の授業は将来に役に立つと思う	1	2	3	4

Q10. いまの学校の先生についてあなたはどのように思いますか。

	とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
a. 先生はおもしろい	1	2	3	4
b. 先生は学問的にも優れている	1	2	3	4
c. 生徒の意見を大事にしてくれる	1	2	3	4
d. 生徒から尊敬されている	1	2	3	4
e. 私が良い成績をとることを期待している	1	2	3	4
f. 勉強以外の面で、私のことを気にかけてくれる	1	2	3	4
g. 「勉強や受験が重要だ」と強調している	1	2	3	4
h. 「国や社会のリーダーにならなさい」と言う	1	2	3	4
i. 「将来は社会のために貢献しなさい」と言う	1	2	3	4
j. 「自分の夢を実現しなさい」と言う	1	2	3	4

Q11. あなたは学校や塾・予備校の授業時間以外に、どれぐらい勉強していましたか。
a~cのそれぞれについて、あてはまる番号1つに○をつけてください。
(ただし、土曜日・休日を除いた日の平均時間を考えてください。)

	ほとんどしない	1時間以下	1時間から2時間	2時間から3時間	3時間から4時間	4時間から5時間	5時間以上
a. 小学校6年生	1	2	3	4	5	6	7
b. 中学校3年生	1	2	3	4	5	6	7
c. 現在	1	2	3	4	5	6	7

Q12. あなたは、塾・予備校・家庭教師を週に何日・何時間ぐらい利用していましたか。
(ただし、土曜日・休日も含めます。また、利用していない人はそれぞれ「0」と記入してください。)

	塾・予備校・家庭教師あわせて (一週間の合計)
a. 小学校6年生	週 [] 日 約 [] 時間
b. 中学校3年生	週 [] 日 約 [] 時間
c. 現在	週 [] 日 約 [] 時間

Q13. あなたの全教科の総合的な成績は、次のうちのどこに位置していると思いますか。
a~dのそれぞれについて、あてはまる番号1つに○をつけてください。

	上	中	下	おぼろげ
a. この学校でのいまの成績	1	2	3	4
b. 全国の同じ学年の人たちの中のいまの成績	1	2	3	4
c. 中学校卒業時のあなたの中学校の 中での成績	1	2	3	4
d. 小学校卒業時のあなたのクラス 中での成績	1	2	3	4

Q14. 勉強について、あなたはどのように思いますか。

● 現在のあなたの考え方についておうかがいします。

Q15. あなたは、以下のことについてどのように思いますか。
a~nのそれぞれについて、あてはまる番号1つに○をつけてください。

	とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
a. 自分には人より優れたところがある	1	2	3	4
b. 自分のことが好きだ	1	2	3	4
c. いまの自分はハッピーだといえる	1	2	3	4
d. 将来は、ハッピーになれる自信がある	1	2	3	4
e. 親と進路の話をする	1	2	3	4
f. 親から強く期待されている	1	2	3	4
g. 親は、私の勉強や教育にお金をかけてきた	1	2	3	4
h. 親は、自分のことに干渉しすぎだ	1	2	3	4

Q16. いまの日本社会について、あなたはどのように思いますか。
a~oのそれぞれについて、あてはまる番号1つに○をつけてください。

	とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
i. 家でのしつけが厳しい	1	2	3	4
j. 親との関係は良好だ	1	2	3	4
k. 毎日の生活が退屈だ	1	2	3	4
l. 将来を考えるよりも「いま」を楽しみたい	1	2	3	4
m. 自分は恵まれているほうだ	1	2	3	4
n. 自分はエリートだ	1	2	3	4

Q17. 日本では、社会で成功するためには何が必要だと思いますか。
以下の項目のうちから、2つまで選んで○をつけてください。

1. 生まれ (家庭環境)	2. 能力	3. 努力	4. 良い学歴	5. 運やチャンス
---------------	-------	-------	---------	-----------

Q18. いまの日本の教育制度や受験制度について、あなたはどのように思いますか。
a~nのそれぞれについて、あてはまる番号1つに○をつけてください。

	とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
a. いまの受験制度は、公平だ	1	2	3	4
b. いまの受験制度は、生徒にとって苦痛だ	1	2	3	4
c. 受験制度は、優れた人材を見つけ育てるために必要だ	1	2	3	4
d. いまの受験制度では、本当の能力は測れない	1	2	3	4
e. 塾に行けない子どもは、良い学校や大学へ行くうえで不利だ	1	2	3	4
f. 日本では、国が教育にたくさんのお金をかけている	1	2	3	4
g. 良い大学に入るためには、お金がかかる	1	2	3	4
h. 学歴が高いほど、能力がある	1	2	3	4
i. 学歴が高い人ほど、良い生活ができる	1	2	3	4
j. できるだけ良い大学に入っておくほうが就職には有利だ	1	2	3	4
k. 女性にとっても高い学歴は必要である	1	2	3	4
l. 成績の悪い者、もしくは学歴の低い者が、将来損をするのはその人の責任である	1	2	3	4
m. 日本の教育制度は国際的に優れている	1	2	3	4
n. 国は、わたしの教育のためにお金をかけてきた	1	2	3	4

● あなたの進路と将来についておうかがいします。

Q19. 1. 東京大学 2. 他の難関国立大学 3. 難関私立大学
4. 普通の国立大学 5. 普通の私立大学 6. 外国の大学
7. 短大・専門学校 8. 家事・家の手伝い 9. 就職

a. 現在あなたが考えている高校卒業後の進路に一番近いものは、うえの1~9のうちどれですか。1つだけ選んで □ に番号を記入してください

b. それでは、高校に入学したときには、どの進路が一番希望していましたか。うえの1~9から1つだけ選んで □ に番号を記入してください

c. 中学校に入学したときには、どの進路が一番希望していましたか。うえの1~9から1つだけ選んで □ に番号を記入してください

Q20. あなたは、将来的にどのような職業につきたいと思っていますか。
 下記の1～12の中から、できることなら、つきたい職業とあまりつきたい職業について、下の □ に番号を1つずつ記入してください。

1. 政治家	2. 医師・歯科医・獣医	3. 大学教授・研究者
4. 国家公務員(上級職)	5. 弁護士・法律家	6. 教員
7. エンジニア・技術者	8. 起業家・会社店の経営者	9. 大企業の管理職
10. 音楽家・芸術家	11. 俳優・歌手・芸人	12. スポーツ選手

a. できることなら、つきたい職業 □
 b. できることなら、あまりつきたい職業 □

Q21. あなたの将来の仕事にとって、重要なことは何ですか。
 下記の1～7の中から、重要な順に2つまで選んで、下の □ に番号を記入してください。

1. 安定した収入	a. 一番目に重要なこと □ b. 二番目に重要なこと □
2. 地位	
3. 名声	
4. 社会に役立つこと	
5. 自分の趣味や好きなことにかかわれること	
6. 自分の能力や才能を生かせること	
7. 楽なこと	

Q22. あなたの将来についておうかがいします。
 a～hのそれぞれについて、あてはまる番号1つに ○ をつけてください。

	とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
a. 国や社会のリーダーになりたい	1	2	3	4
b. 日本をもっと暮らしやすくしたい	1	2	3	4
c. 社会的弱者を助けたい	1	2	3	4
d. 日本よりも海外で活躍したい	1	2	3	4
e. 誰にもまねできないことをしたい	1	2	3	4
f. どんな分野でもいいから、一番になりたい	1	2	3	4
g. 周りから尊敬されるような人間になりたい	1	2	3	4
h. 歴史に名が残る人になりたい	1	2	3	4

● 最後に、あなたのご両親についておうかがいします。

Q23. あなたのお父さんとお母さんは、現在あなたが通っている高校の卒業生ですか。

a. お父さん	1. はい	2. いいえ	3. わからない
b. お母さん	1. はい	2. いいえ	3. わからない

7

Q24. あなたのお父さんとお母さんは、どのような職業についていますか。
 下記の1～21の中から、お父さんとお母さんのそれぞれについて、あてはまる番号を1つ選び、下の □ に番号を記入してください。

1. 政治家	2. 医師・歯科医・獣医	3. 大学教授・研究者
4. 国家公務員(上級職)	5. 弁護士・法律家	6. 教員
7. エンジニア・技術者	8. 起業家・会社店の経営者	9. 大企業の管理職
10. 音楽家・芸術家	11. 俳優・歌手・芸人	12. スポーツ選手
13. 事務的な仕事(役所や会社、商店などで事務的な仕事をしている人)		
14. 販売関係の仕事(店員、セールスマン、保険外交員など)		
15. 農林漁業		
16. 運輸・通信従業者(運転手、郵便配達、鉄道関係など)		
17. 技術工・労務関係の仕事(工員、または大工・左官などの職人および人夫など)		
18. サービス関係の仕事(理髪師、ホテル・旅館の従業員など)		
19. 専業主婦・主夫		
20. その他 (下のカッコの中に具体的に書いてください)		
21. 父・母はいない		

「20. その他」の場合は具体的に
 a. お父さん □ () ←
 「20. その他」の場合は具体的に
 b. お母さん □ () ←

Q25. あなたのお父さんとお母さんが最後に卒業された学校はどれですか。
 お父さんとお母さんのそれぞれについて、あてはまる番号を1つ選び、下の □ に番号を記入してください。

1. 中学校	2. 高校	3. 短大・各種・専門学校・高専
4. 日本の大学	5. 海外の大学	6. 日本の大学院
7. 海外の大学院	8. その他	9. 父・母はいない

a. お父さん □ b. お母さん □

Q26. あなたの家の経済的豊かさはどれぐらいだと思いますか。
 あてはまる番号1つに ○ をつけてください。

豊かである	やや豊かである	あまり豊かでない	豊かでない
1	2	3	4

*
 以上でアンケートは終わりです。ご協力ありがとうございました。

8